

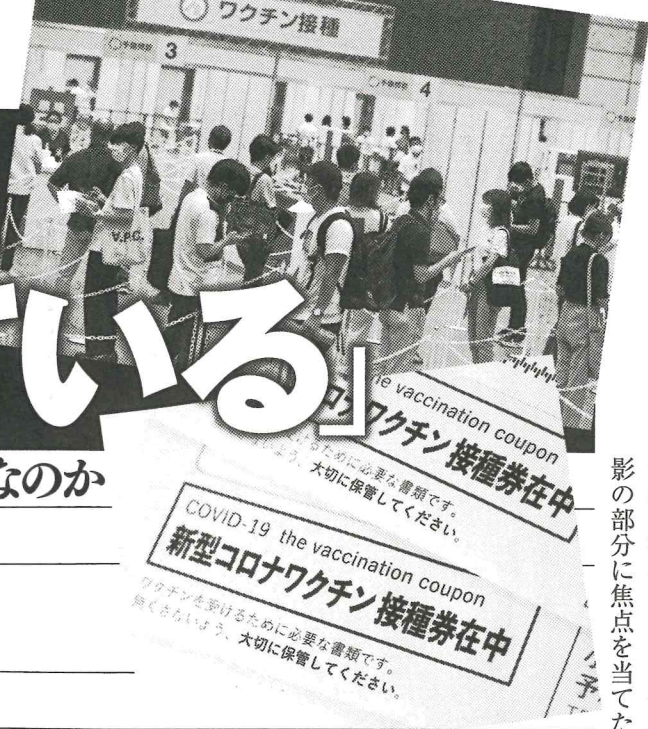


闇に葬られた警告

「コロナワクチンは生命原理に反している」

特集

- ▶「短期間で分解されるからDNAに影響しない」は本当なのか
- ▶遺族が明かす「同じ生産ロットで他にも死者が…」
- ▶厚労省「副反応検討部会委員」が心情吐露
- ▶「他の薬に比べて評価がキツイな」
- ▶今すぐやめろ「旅行支援」に「ワクチン接種証明」差別



これまで本誌は7回連続でコロナワクチンの光と影について様々な方向から検証してきた。

増え続ける接種後死亡事例。3回目ワクチン接種率と超過死亡の不気味な相関。海外で相次ぐ、ワクチンの影の部分に焦点を当てた報

現実を知った上で打つか否かの判断を

いまだ「聞く力」の持ち主に届かない遺族の声

「ヒトゲノムについて本当に分かっているのはごく一部。遺伝子のうち発現して私たちが捉えている部分を『エクソン』と呼びますが、それは全体の1・5%でしかない。今はそれに加えて、エクソンの機能を支える『イントロン』という部分

最悪のシナリオ

と書いてあるが、「短期間で分解されたらコロナウイルスに対する効果が出ないはずですから話になりません。すぐに分解されないようにすることで、実用化にこぎつけたわけですから、科学をまるで分かっていない連中の文章です」(同) 厚労省のHPには次のような記述もある。

「ヒトゲノムについて本当に分かっているのはごく一部。遺伝子のうち発現して私たちが捉えている部分を『エクソン』と呼びますが、それは全体の1・5%でしかない。今はそれに加えて、エクソンの機能を支える『イントロン』という部分

行で、逆にmRNAからはDNAはつくられません。こうしたことから、mRNAを注射することで、その情報が長期に残ったり、精子や卵子の遺伝情報に取り込まれることはないと考えられています」

の働きが分かってきていますが、それを含めても全体の4分の1以下しか分かっていないのです」 福島氏はそう解説する。「そういった研究が進むうちに、ヒトゲノムの中には、LINE-1と呼ばれる遺伝物質があることが分かっ

てきました。この遺伝物質は逆転写酵素を発現する。つまり、外部からの遺伝物質を、複雑なメカニズムを経て自らのゲノムに組み込むことができるのです。今回のワクチンでもそうしたメカニズムで逆転写が起る可能性は元々指摘されていました」

告や報道……。そうした点について本誌は毎回、様々な専門家の解説をご紹介してきたが、7回連続で論評をお願いしたのは次の二人だけである。京都大学附属病院外来化学療法部長などを歴任した京大名誉教授の福島雅典氏と、長年小児がきた名古屋大学名誉教授の小島勢二氏。二人は世界中で接種がスタートする前からワクチンの「正体」を見抜き、警告を発していた。「生命原理に反している」ワクチンについてそう断ずる福島氏。その理由は、ワクチンのメカニズムそのものにある。

「本来、体内にmRNAを取り入れても、RNA分解酵素によってすぐに分解されます。しかしコロナワクチンでは、効果を一定期間持たせるため、mRNAを色々と修飾しています。また、それを脂質ナノ粒子の中にに入れることで、細胞に効率よく取り込まれるようにしています」

「体内において非常に安定で、あらゆる細胞に取り込まれる。mRNAというすぐ分解されるはずの物質が、一定期間体中を漂っているというのは、生命原理に反しています。そんな状態に人間が晒されたことは、これまでの長い歴史で未だかつてありません」

70%以上がワクチンを打てば集団免疫が得られ、コロナの流行は終息する、と流布されていたが、「それについても、コロナが変異して予防効果が低下すれば、集団免疫の達成は困難だ、と別の論考で指摘していました」

小島氏はそう話す。

「今振り返ってみると、我が国は私が3年前に懸念した『最悪のシナリオ』通りの経過を辿っています。当時の私の主張はごく当たり前のことであって、今は異端視されても、歴史が判断する」という思いで自分の考えを述べていました」

しかし当時、福島氏や小島氏の警告は我々のところには届かなかつた。ワクチンのマイナス情報を全て封殺するような異様な雰囲気の中で、多くの人は、あなた



「科学者として責任ある行動を取る」と語る福島氏

と大切な人のためなんです」という政府のアピールを信じて接種を決定した。しかし、集団免疫が得られる様子はなく、コロナの流

急性心機能不全

何度も指摘しているが、

これは現在進行形の話なのだ。昨年末、本誌がこの問題に斬り込み始めた時の接種後死亡例は1908件だったが、現在は1966件まで増えている。相変わらず厚労省が因果関係を認めないケースはなく、9割以上が「評価不能」とされている。

ワクチン接種と死亡の因果関係を調べ、判定を下すのは独立行政法人・医薬品医療機器総合機構（PMDA）が選定した専門家。そこから上がってきた評価を元に、厚労省の副反応検討部会にて、ワクチン接種を継続するか否かを検討することになっている。

厚労省の副反応検討部会

行も終息しない。高齢者の重症化予防効果はあったとはいえず、追加接種を進めれば進めるほど、接種後死亡例は積み重なっていく。

の委員の一人は、

「最終的な評価はPMDAの委員の方がされているので、評価の基準は私たちに分かりません」

そう繰り返すのだが、個人的にはと断った上で次のように証言するのだ。

「他の薬と比べると、評価がキツイなと思います。子供だとか、若い方が亡くなったケースがありますよ。そういう例は最終的には心筋炎やアナフィラキシーと判断されて、*シグナル*なのですが……。そういう例への基準はちょっとキツイなというか、(評価)不明のままです出すのもどうかと思います。ただ、基準を決めるのは向こう(PMDA)です……」

死亡事例全てに目を通してきた当の検討部会委員ですら、ほとんどが「評価不能」とされていることに疑問を抱いているのだ。これでは、最初から「因果関係は認めない」と決まっていたのではないかと疑われているのではないかと疑われている。も仕方なからう。

「ワクチン接種と兄の死の因果関係は?判定、評価不能」ということになっていますが、それでも因果関係があるのではないかとという疑念は私の中では拭いきれません」

そう語るのは、実兄・孝幸氏をワクチン接種後に亡くした妹の吉田さん。孝幸氏は21年8月5日にファイザー社製ワクチンの1回目接種。2回目接種は8月26日で、その5日後に死亡した。享年58。

「兄は名前の通り親孝行で家族思いの人でした。奥さんと二人暮らしで子供はいません。仕事はフランチャイズ加盟店のオーナーとして清掃請負業をやっていた

ました。いたって健康で通院歴も、服用していた薬もありませんでした」

3人きょうだいで、吉田

さんが一番下、孝幸氏は二番目。一番上の兄は独身で、福井県にある実家で88歳の母親と同居している。

「コロナ前は私と真ん中の兄(孝幸氏)で交互に2週間に1度くらいのペースで実家に帰り、母の世話をしていました。しかし、コロナ後は実家に県外ナンバーの車が停まっていると、近所の目があるし、コロナになるのも怖いから、来てくれるな」ということになりました。それが21年3月頃の話です」

吉田さんが振り返る。「ワクチン接種が始まってすぐの21年6月、私はワクチンに懐疑的だったので調べてみたら接種後死亡者が300人以上も出ていた。それで母にも兄にも接種の危険性を伝えていたので、母はやはりコロナに感染するのが怖いというの

と、街でコロナが出たら執拗に感染者探しをするような状況もあり、7月に2回目の接種を済ませました」

コロナ前のように母親に会いたいという思いが強かった孝幸氏は、一般枠が始まるとすぐに接種を申し込んだという。

「8月31日に兄の奥さんから電話がかかってきてすぐ駆け付けたところ、もう救急車も警察車両も来ていてリビングのソファの下に冷たくなった兄が倒れていました。家の中を探したら、8月26日(木)付のワクチン接種券が見つかりました」

接種当日、翌日、翌々日は仕事を休んだ孝幸氏。

「日曜日は微熱や倦怠感があつたみたいなのですが、仕事に出て、夕方には母に電話もしているんです。ワクチンを打ったから、ようやく9月半ばには実家に帰れるよ」といった話をしたそうです。その時、腕の痛みがあつて、疲労感もあつてすぐぐだるいとは言っていたようです」

31日の朝も倦怠感を訴えていたというが、「兄は7時過ぎには仕事のために家を出て、その後、兄の奥さんも仕事へ。それで、奥さんが午後6時半に帰ってきたら兄がソファの上で冷たくなっていた。奥さんは何とか兄をソファから降ろし、心臓マッサージをしながら119番に電話をしたそうです」

司法解剖の結果、死因は急性心機能不全とされた。

「死のロット」

厚労省がHP上で公開しているワクチン接種後の死亡として報告された事例の一覧を見ると、孝幸氏と同じロットのワクチンを打って死亡した人は全国で9人いたことが分かる。そのうち65歳以上の高齢者は二人だけで、一番若い人は23歳の男性となっている。また、本誌で以前ご紹介した宮城県の須田正太郎さん(36)も当時が亡くなったケースでも、同じロットで

「兄の死後、自治体に情報公開請求をしたんです。すると公開された書類の中に、兄と同じ時期に同じ地域で同じ生産ロットのワクチンを打った52歳の男性がこれまた心疾患で亡くなったということが書いてありました。それを見て、私も声を上げてワクチンの危険性を訴えなければいけないと思い、「コロナワクチン被害者駆け込み寺」の活動に参加するようになりました」

複数の死者が出ている。全国で7人。そのうち一番若いのは、13歳の男性である。一方、死亡例が全く報告されていないロットも複数ある。

「コロナワクチンはmRNAを脂質の膜で包んだ粒子ですが、その粒子に含まれるmRNAの量にはバラつきが生じることが分かっています」

と、先の小島氏は言う。「以前、EMA(欧州医薬

品庁)から流出したデータを元にイギリスの医学誌『BMJ』(ブリティッシュ・メディカル・ジャーナル)がワクチンに含まれるmRNAの量のバラつきについて報じたことがありました。EMAは「品質には問題ない」と弁明しましたが、BMJは「いかにしてEMAが懸念を払拭したのかは不明」として透明性の確保を訴えています」

「死のロット」とそうではないロットが存在するとなると何とも不気味だが、先の福島氏はこう主張する。

「今、コロナワクチンを打った人に、死亡者も含め、すでに多くの健康被害が出ている。早急に診療ガイドラインを作成、診療体制を確立して、さらに分子病理メカニズムの研究を促進しなければなりません。そのため、接種時期やロット番号を記した『ワクチン接種手帳』を持つようにするべきだと思います」

すでに「大被害になっていく」と指摘する声も上が

っているが、政府がワクチン接種推進の姿勢を見直す様子は全くない。それどころか「全国旅行支援」などは、未だにワクチン接種済みの提示が利用条件の一つとなっている。お上りが何も考えていないことの証左であろう。

「ワクチンの境界―権力と倫理の力学」の著者で神戸大学大学院経営学研究科教授の國部克彦氏の話。

「旅行支援のワクチン要件は完全に差別です。こんな制度はすぐにやめなければいけません。ワクチンを打ったらコロナに罹らないという話ならまだしも、当初言われていた感染予防効果は期待外れで、今は重症化予防効果なんて言われている。にもかかわらず旅行者支援制度の要件にワクチン接種が書かれているのは別の強い意図を感じます」

繰り返しになるが、大事なのは「知る」ことだ。現実を知れば、大本営発表の「聞こえ方」もおのずと変わってこよう。

週刊新潮

2月16日号
440円

読者アンケート
実施中!



St. Valentine

6